

ミクロネシアのヤップ島は、巨大な石貨(ストーンマネー)で有名だ。島内のいたるところで石貨を見ることができる。この石貨は、ヤップで作られていたのではない。600km離れた遠くパラオまで、マホガニーの丸木をくり貫いて作ったシングルアウトリガーカヌーで旅をして、石灰岩を切り出して加工し、カヌーにイカダをくくりつけて、そこに石貨を載せてヤップ島まで運んだ。

当然のことながら、GPSも羅針盤も無い時代の外洋航行。彼らヤップ人を正確にパラオへ、そして帰路のヤップへと導いてくれたのは、夜空に輝く満点の星たちだった。「スターライトナビゲーション」。もちろん大昔には、ヤップ人だけでなく、陸を離れ新天地を求めて大海原に乗り出した人間の多くが、おそらくこのスターライトナビゲーションの技術を身につけていたのだろう。しかし、文明の発達した現代社会において、この航海術をいまだに実践で駆使できる人が果たしてどれくらいいるのだろうか。

ヤップ島を訪れたときに、伝統的な方法でシングルアウトリガーカヌーを作っている現場取材させてもらった。指導者(マスタービルダー)は84歳になるフランという老人だった。彼は流暢な日本語で僕たちと会話を続けた。ミクロネシアに住む老人たちから日本語を聞いた時、戦時中、島々が日本軍の統治下にあったことを思い出させる。

そして、その傍らには、カヌーのオールを作る若者の作業を寡黙に見守る車椅子の老人がいた。クリスチャンネームでトビヤスと皆から呼ばれる彼こそが、「スターライトナビゲーションの伝承者であるマスターナビゲーターだ」とフラン老人に教えてもらった。

ヤップの離島、サタワル出身。彼の一族は、今でもスターライトナビゲーションだけで、外洋航海を行うことが可能なのだそうだ。トビヤス老人

の兄は、数十年前、ハワイからタヒチへのカヌーでのスターライトナビゲーションを成功させた。そして、今、ハワイからミクロネシアの島々を移動して日本を目指す、大型カヌーHokulea号に乗り込んでいるのは彼の息子だと聞いた。残念ながら僕のヤップ滞在中に、このカヌーはマジュロ〜ポンペイ間を航海中で、見ることはかなわなかった。

彼らの下で多くの若者がヤップの伝統を学んでいる。これは現ヤップ酋長のブルーノ氏が奨励しているもので、他にも多くのことを、老人たちを指導者にして若者たちに伝統を伝承していくためのプログラムが準備されている。

STARLIGHT NAVIGATION

写真/文 越智隆治

この島では、伝統の伝承者として老人たちが若者から尊敬されている。当たり前のように若者に詐欺の被害者にされてしまう日本の老人たちと比べて、いかに幸福で誇り高い生き方をしているかは、誰でも想像がつくだろう。

伝統的工法でカヌーを作り、その船で星を見ながらの航海術を身につける。便利になりすぎてしまった日本では、「無駄なこと」と思われてしまかもしれない。ヤップ島でも、一部の離島を除いては、エンジンをつけたスピードボートが普通に行き来する時代だ。けれど、伝統と、そしてそれを次世代に伝承する者を尊び、敬う気持ちを身につけるという意味でも、こういうプログラムを奨励することは重要ではないかと感じた。



People
Photo Column by the Sea 07